

ないものがあると、信じてることができた時、

七色の海の物語



魔法使いになれるんだ。

スピリチュアル・アドベンチャー・ストーリー

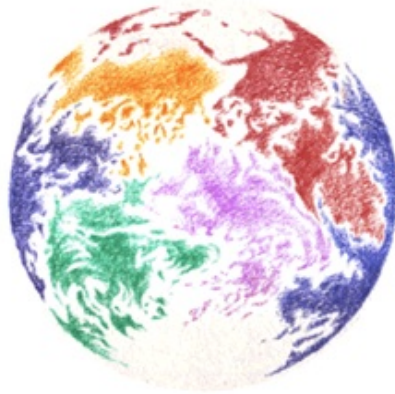


ないものをあると

信じることができた時

魔法使いになれるんだ

プロローグ



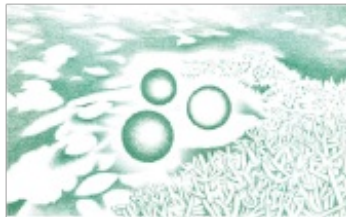
プロローグ

大きな宇宙に七色に光り輝く星がありました。

この星には、赤、橙、黄、桃、緑、青、紫。

七色の美しい海が広がっています。

物語の舞台は、この水の星です。



主人公は緑色の水球エメラルド。

エメラルドは緑色の海で、父と母と三つで幸せに暮らしていました。

しかし、ある日のことでした。

なんと大好きな母が真っ白に光り輝き消えてしまったのです。

消えてしまった母がどうなってしまったのか？

知るものはいませんでした。

エメラルドは深海に住む物知りの長老様にたずねました。



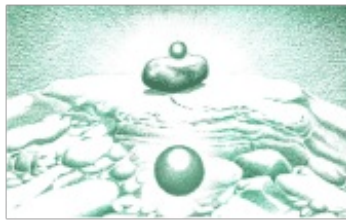
「そうじゃのう。わしら水球の寿命は八百年くらいじゃ、

果たして消えるとどうなるのかのう？」

長老様も、それを答えることができませんでした。

「エメラルドよ、それを知りたければ虹色の海へ行くがよい。

七色の海の果てに、どんな願いも叶うという伝説の海があるときく」



エメラルドは母のことを知るために、

どんな願いも叶うという、虹色の海を探しに旅立ちました。

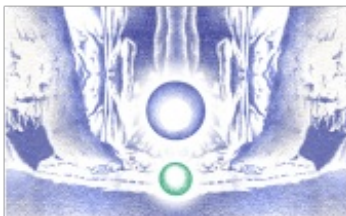
しかし、エメラルドを待ち受けていたのは、

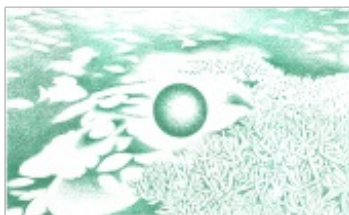
七つの世界と七色の海の長老たち。

旅の中で、驚き、喜び、恋し、笑い、泣き、戦い、病み、愛し、

エメラルドはこの世界の真実に出会う。

スピリチュアル・アドベンチャー・ストーリー。





「エメラルド」

緑色の海で幸せに暮らしていたエメラルド。

しかしある日、大好きな母が真っ白に光り輝き消えてしまう。

エメラルドは母にもう一度会うために、

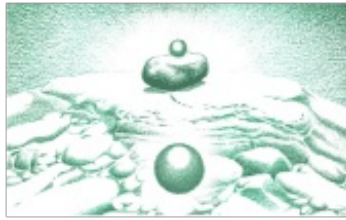
どんな願いも叶うという虹色の海を探しに旅立つことを決意する。



「ローズ」

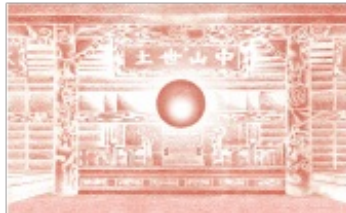
ピンク色の水球ローズ。桃色の海に住む。黒色の病にある、おばあさんと暮らしている。

エメラルドと出会うことで、どんな病も癒すことができる虹の花を探しに旅立つことを決意する。



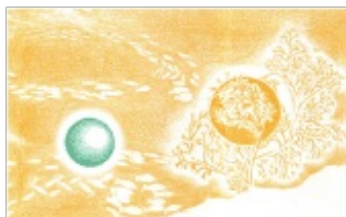
「ヒスイ」

緑色の海の長老ヒスイ。深海の深くにある古代の遺跡を住家になっている。
古代文明の研究者。遺跡の碑文から物質の本当の形を紐解こうとしている。
母のことで思い悩むエメラルドに旅立つことをすすめる。



「コハク」

オレンジ色の海の長老コハク。豪華な竜宮城に住んでいる。なによりも利潤を最優先する資本家。
多くの水球たちを使い、魚を捕まえ売りさばいている。
エメラルドに「村に住み、法を守り、働き、納金せよ」と迫る。



「トパーズ」

黄色い海の長老トパーズ。黄色いサンゴにつながり生きる。時空を超える術を知るもの。

今は満月のお祭りの準備をしている。エメラルドに虹色の海に行くための秘訣を伝える。



「ルビー」

赤色の海の長老ルビー。堅固な赤い城に住んでいる。

七つの海を支配するために、二千年戦い続けている。

相手を威圧、恐怖させてエネルギーを奪い取る。

エメラルドが兵隊になることを拒否したため、決闘をすることになる。

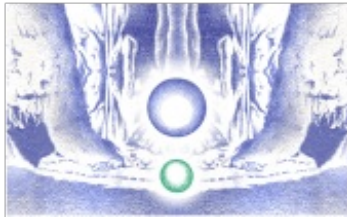


「サファイア」

桃色の海の長老サファイア。花の森で暮らしている。花の香りをかいでエネルギーを得る。

「この世界を花の香りで、愛の香りでいっぱいにしてみせる」と誓う。

そんなサファイアの輝きがエメラルドの心の中心を射す。

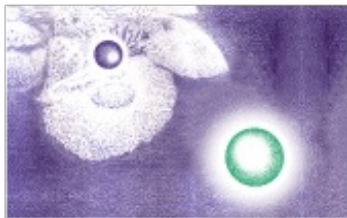


「ラピスラズリィ」

青色の海の長老ラピスラズリィ。青色の海の深く深くにある病の村に住んでいる。

瑠璃色の光を放つ力を持ち、病にある水球たちを癒している。

闇の深海に落ちて行くエメラルドを助ける。



「アメジスト」

紫色の海の長老アメジスト。紫色のサンゴの上に四万年座り続けている。

サンゴの不思議な生態について研究している。

エメラルドを夢の世界へといざない、本当の自分とは何かを見せる。

題一話 虹

太陽は輝いていました。

雨上がりのさわやかな風に吹かれながら、エメラルドは海に浮かんでいました。

「虹よ、あなたは本当はどんな色をしているの？」

空を見上げて言いました。

「遠くからだとこんなにはっきり見えるのに、近くに行くといつも見えない ...」

エメラルドは何度も虹を追いかけました。

けれど、そばに行くといつも虹の姿は見えなかったのです。

「不思議 ...」

そんなことを思いながらエメラルドは大きな海に潜りました。



題二話 水球エメラルド

エメラルドは緑色の海で父と母と三つで暮らしていました。

「パパ、ママ、今日も虹が見えたよ。本当にステキだわ」

「ハハハッ、エメラルドは本当に虹が好きなんだな」

「うん。だってわたし虹に恋してるもん」

虹を見ているといつも、なんとも言えない新しい気持ちになるのです。

「ねえ、ママ。わたしも虹みたいに大空を駆けめぐりたい」

「そうね、虹になれたらきっと楽しいでしょうに」

「うん、そしたら大空からこの星を見てみたいわ」

「そうね、それはロマンテックね」

エメラルドは母の優しい声が好きでした。

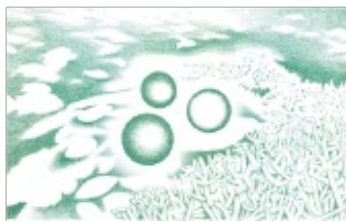
「ママ、あの唄のつづきを聞かせて」

「ええ、いいわよ」

エメラルドは母の子守唄が好きでした。

母の声を聞いていると不思議と気持ちよくなり、

いつもぐっすりと眠ってしまうのです。



題三話 不安

エメラルドは海に潜るのが好きでした。

深く潜れば潜るほど不思議と気持ち良くなっていくのです。

けれど近頃はあまり楽しくありません。

母の事を考えると、どうしても不安になってしまうのです。

そんなことを考えていると、エメラルドはイルカたちに囲まれていました。

「どうしたんだい、エメラルド。なんだか元気ないなあ」

「ねえ、イルカさん。ママの緑色がだんだん、うすくなって、
消えてしまいそうなの。大丈夫かな ... ?」

エメラルドはイルカたちに母の色の事を相談しました。

「わからない。長老様なら知っているかもな」

「長老様？」

「そうさ、この緑色の海で一番の物知りだからな」

「長老様はどこにいるの？」

「深海だよ、ずっとずっと深い海底に住んでいる。でもエメラルドには深海はまだ無理かもな」 「そんなことないわ。

わたしは潜るのは得意なのよ」

エメラルドは自信満々に言いました。

「そういう意味じゃない。深海は自分の心を映し出す鏡のような世界」

「心が強くないと行けないよ」

イルカたちは声をそろえて言いました。そして静かに心を澄ませていました。

「エメラルド、ママが呼んでいるよ。急いでお家に帰りな」

「えっ ママ ... ?」

エメラルドは急いで母のもとへ帰りました。



題四話 母の遺言

エメラルドは驚きました。なんということでしょう。

母の球体が真っ白に光り輝いているのです。父はそばで静かにそれを見守っていました。

「ママ ... 」

「エメラルド、さよならのときがきたようね」

母の緑色は今にも消えてしまいそうでした。

「ママ！ どこへも行かないで！ お願いだから！」

いつも元気をくれた母。やさしく包み込んでくれたその声。

エメラルドは母のことが本当に大好きだったのです。

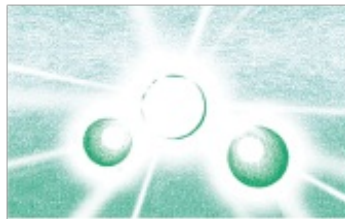
「エメラルド、安心なさい。わたしはいつもあなたを光り照らしているから」

「ママ ... 」

「いつもみんなと ... みんなとつながっていることを忘れないでね ... 」

母は最期にそう言い残し、真っ白に光り輝き消えていきました。

エメラルドは涙があふれて止まりませんでした。



「ママ ... いったいどこへ行ってしまったの？」

エメラルドは何度も考えたけれどわかりません。

父にも海のみんなにも聞いたけれど、だれも知りませんでした。

「長老様なら知っているかも知れないわ ... 」

エメラルドは深海に行きたくて、ウミガメに会いに行きました。

「ウミガメさん、お願いがあるの。わたしを長老様のところへ案内してほしいの」

「しょーがねえな。まかせとけ！連れて行ってやるよ！」

ウミガメは得意気に言いました。

「そのかわり絶対にオイラから離れるなよ。しっかりとつながりな」

「うん」

エメラルドはウミガメの背中に乗っかりました。なんだかとってもワクワクしてきました。

「深海に行く時はなあ、ごちゃごちゃと考え事をするなよ。しっかりと集中するんだぞ」

「何に集中するの？」

「行きたい場所だけに気持ちを集中するんだよ。

気をぬくとすぐに望まない世界に流されちまう！」

ウミガメは真剣に言いました。そしてゆっくりと呼吸を整えていました。

「わかった」

エメラルドがそう返事をする、ウミガメは深い深い海の底へと潜って行きました。

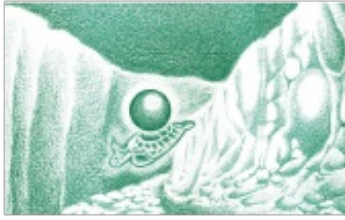
そしてぐんぐん潜っていくと海底に何か光り輝いているのが見えました。

その輝きは美しい緑色でした。

「ほら、あそこに不思議な形をした岩があるだろう。あの辺りだよ」

「ありがとう、ウミガメさん」

エメラルドはウミガメに別れを告げて、その不思議な岩の方へ向かいました。



不思議な形をした大きな岩は緑色に輝いていました。

「これはいったいなにかしら？」

「うむ。古代の文明の遺跡じゃよ」

岩の中から声が聞こえてきました。

すると目の前に、スーッと小さな緑色の水球が現れました。

「あなたは ...」

「わしがこの緑色の海の長老ヒスイじゃ、よくここまできたのう」

「はじめまして、わたしはエメラルド。長老様に聞きたいことがあって ...」

「うむ。おぬしが聞きたいことは知っておる。母がどこへいったのか知りたいのじゃな」

なんと長老ヒスイはエメラルドの心の中を既に知っていました。

「長老様、ママはどうなってしまったの？ 消えてどこへ行ってしまったの？」

「エメラルドよ、わしら水球の寿命は八百年ぐらいじゃ。

果たして消えるといったいどうなるのかのう。心も全て消えてしまうのか？

もしくはこの無限の銀河のどこかで、それは存在し続けておるのか」

ヒスイは水面の遥か遠くにある太陽を見上げていました。

「どっちなの？ 長老様はなんでも知っているんでしょう」

「いやあ、そんなことは消えてみないとわかりやせん。

いまだ解き明かせぬ永遠の神秘的なのじゃ」

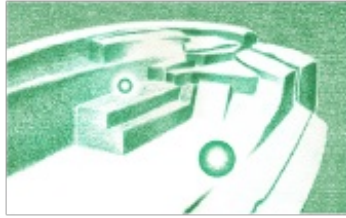
ヒスイはあっさりそう答えました。けれどエメラルドの強い気持ちはおさまりません。

「長老様、わたし ... ママにもう一度会いたい ... どこにいるのか知りたいの！」

「ならばエメラルド、虹色の海へ向かうがよい」

「虹色の海？」

緑色の海の長老ヒスイは静かに語り始めました。



題七話 旅の掟

「この七つの海の果てのどこかに、虹のように煌く神秘的な海があると聞く」

「虹色の海 ...」

エメラルドは少しドキドキしていました。

「その海はなあ、どんな願いも叶うという伝説があるのじゃ。

おぬしの願いも叶えられるやしれん」

遺跡の中央に緑色の石が飾られていました。ヒスイはその石の上でくつろいでいました。

「長老様、わたし旅に出る。虹色の海を探しに行くよ！」

エメラルドは強い決意を抱いて言いました。

「うむ、そうじゃ。旅立つのじゃ。この世界を知ることは、己を知ることで」

「うん」

「針路は朝日が昇る東じゃ。エメラルドよ、虹色の海への旅は時には険しいかもしれぬぞ」

「えっ ...」

ヒスイはエメラルドをまっすぐに見つめて、こう言いました。

「じゃが何が起こっても、決して恐れてはならぬぞ。

恐れれば恐れるほど、それを惹きつけることになる」

「うん ...」

「それが旅の掟じゃ、忘れるでないぞ」

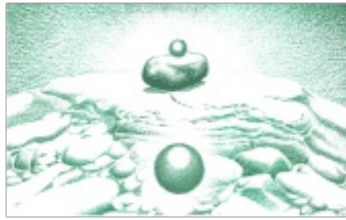
「わかったよ、長老様。本当に色々ありがとう」

「なあに気にすることはない、こんな小さな星の仲間じゃろうに」

ふたつは見つめ合いました。

「フッ、そうね。こんな小さな星の仲間だもんね」

長老ヒスイはにっこりと微笑みながら、エメラルドを最後まで見送りました。



題八話 旅立ちの時

風が眠る静かな夜でした。

三日月はうっとりとし、星たちは今夜もキラキラと輝いています。

エメラルドは父と夜空を眺めていました。

「パパ... ママはどこへいったと思う？」

「そうだな、太陽にいるのかもしれないな」

父はエメラルドの覚悟を知っていました。

「エメラルド、あの月の光に誓ってわたしと約束してくれ」

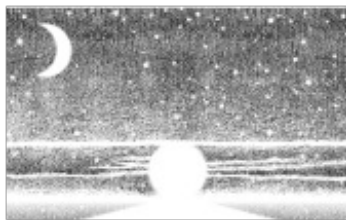
「なに... 」

「道の途中で、何があっても絶対に諦めるなよ。諦めなければ必ず道は開けるから」

「うん。わかったよ、約束するよ」

父はエメラルドに旅立ちの言葉を贈りました。その夜は月光が煌く本当に美しい夜でした。

こうして、エメラルドの長い長い旅は始まりました。



題九話 竜宮城

エメラルドは東の海へ向かいました。波の流れに上手に乗りながら一生懸命泳ぎました。

ドンドン。ドンドン。

「なんの音かしら ...」

どこからか賑やかな声も聞こえてきます。エメラルドはその音のする方へ行ってみました。

すると、うっすらと遠くに、なんと橙色のお城が見えるではありませんか。

「まあ、なんてキレイなお城かしら」

そこでは橙色の水球たちが、魚を獲ったり運んだり大忙しで働いていました。

「おい旅のもの、邪魔だぞ。そこをどいてくれ。魚を逃がしちまうじゃねえかよ、まったくよお」 橙色に光る水球がエメラルドの前に来ました。

「みんないったい何をしているの？」

「見りゃわかるだろ、魚を捕まえてんだ、仕事だよ。

あぁーっ腹がへった。魚でも食うか、バクッ！」

「えええーっ！」

エメラルドは驚きました。なんとその水球は魚を食べてしまったのです。

「おまえも食うか？ 魚を食って元気をもらわないと、

この村じゃ生きていけねえ。過酷だからな、この海は」

その水球はしみじみと言いました。

「あなたの村ではお魚を食べるの？ 変わっているわね」

「俺も最初はとまどったよ、けど慣れるとけっこういけるぜ」

エメラルドには奇妙に感じました。緑色の海では魚たちは友達だったからです。

けれどこの海の魚たちとは話すことができませんでした。

「ねえ、あのお城はなに？」

「この辺りの海を治めている長老、コハクの城さ。気をつけな、奴は欲深い資本家だからな」

「資本家？」

「そうさ、奴は仲間よりも、利潤と権力と黄金が最優先なんだ！」

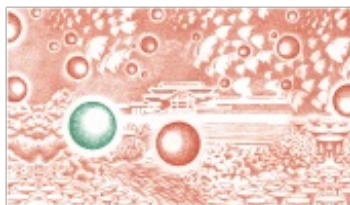
ドンドン！ ドンドン！

ドンドン！ ドンドン！

大太鼓の音が大きくなってきました。宴の準備でしょうか。

「いいにおい ... 」

美味しそうなお馳走のにおいに誘われて、エメラルドは橙色のお城へ入って行きました。



エメラルドは驚きました。お城の中は豪華絢爛。

なんと部屋一面に黄金がちりばめられているのです。

橙色の長老は玉座に座り、黄金を数えながら、エメラルドを見下ろしました。

「俺はこの橙色の海の長老、コハクだ。

お前は旅の流れものだな。俺にあまり近づくな、少し下がれ。身分をわきましろ」

長老コハクは偉そうに言いました。

そんなコハクの言いぶりに、エメラルドは久しぶりにムツとなってしまいました。

「あなたみたいな威張りん坊に会ったのは初めてよ。本当にとっても新鮮だわ」

それもそのはずです。エメラルドの村には偉そうにするものはいなかったのです。

「なんて生意気な奴だ、まあいい。お前も俺の村に住め、土地を貸してやろう」

コハクは威張りながら、さらにこう言いました。

「月が満ちる、毎の月、必ず黄金を納めてもらうぞ。

魚も勝手に獲るなよ。この橙色の海は全て俺の物だからな」

そんなコハクの言い分にエメラルドは納得できませんでした。

「この海はあなただけのものじゃないわ、みんなのものよ。

だからみんな好きな所に自由に住めばいいのよ」

エメラルドはきっぱりと言いました。

「そうか、流れものには橙色の海の常識がないのだな。

全ての土地、物には所有者がいる。村の法を知らないのだな」

ドン！ ドン！ ドン！ ドン！

ドン！ ドン！ ドン！ ドン！

大太鼓のリズムが大広間に大きく響きました。どうやら宴の時間の始まりのようです。

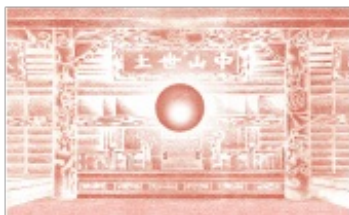
「今日は俺様の誕生の祝い。流れものよ、貴様も宴に招いてやるぞ」

「ありがとう。でもわたしは遠慮しておくわ、急いでいるから」

エメラルドの心の中はいつも母に会いたい。

虹色の海へ行きたい。その事でいっぱいでした。

そしてコハクといえは、ほろ酔い気分で踊り、夜が明けるまで騒いでいたようです。



題十一話 黄色い珊瑚礁

エメラルドは東の海へ旅を続けました。

プカプカ。プカプカ。

自然と波の流れに身を委ねていました。

「プアァーッ、気持ちいい。なんてキレイな海なのかしら」

エメラルドは大空を見ながら、まったりとくつろいでいました。

すると海の色がだんだんと変わっていくではありませんか。

エメラルドはすかさず、その不思議な海に潜りました。

そこは沢山の黄色い珊瑚が生きる美しい海でした。

「まあピカピカ。なんてキレイな色をしているの」

「君には僕たちの姿が見えるんだ。おめでとう、黄色い海へようこそ」

黄色い水球たちが上機嫌で話しかけてきました。

「ありがとう。わたしはエメラルド、緑色の海から来たの」

「そうか、色々な事があつたろ。この村でゆっくりしていきなよ」

「うん、ありがとう」

エメラルドは辺りを見渡しました。そこは金色の草原のような美しい村でした。

「君も珊瑚につながって元気をもらいなよ」

エメラルドは黄色い水球たちのように珊瑚にくっつきました。

「ウフッフ、なんだか気持ちいいわ」

エメラルドは元気いっぱいになり、みんなと遊び始めました。

「エメラルド！」

「えっ？」

どこからかエメラルドを呼ぶ声が聞こえてきました。

「エメラルド。久しぶりだな、こっちに来いよ」

「あなたはだれ？」

黄色い海の中には大きな黄色い珊瑚がありました。

どうやらその声はそこから聞こえてくるようです。



題十二話 信じる力

黄色い水球が珊瑚に絡みついていた。それはとても神秘的な光景でした。

「エメラルド、君が来るのを楽しみに待っていたよ」

「久しぶりって、あなたに会うのは初めてだと思うけど」

「何度も会っているよ。君は未来の事をすぐに忘れるからね」

黄色い水球は嬉しそうに言いました。

「未来の事なんか憶えてないわよ。あなたは不思議ちゃんね」

「僕からみると君の方がずいぶん、不思議ちゃんだよ」

おもしろいことを言う水球だなあ、とエメラルドは思いました。

「しょうがないな。はじめまして、僕の名前はトパーズさ。

僕も遠い昔、君のように虹色の海を探して旅をしたんだよ」

「あなたも旅をしていたのね。虹色の海は見つけたの？ 願い事は叶えてもらったの？」 エメラルドは少しでも虹色の海の事を知りたかったのです。

「それが何度も何度も探しているうちに疲れちゃってさ ... 。

この海でブカブカしていたら、黄色い珊瑚につかまって黄色になってしまったのさ」

「フッフッ、あなたの黄色はとてもキレイだと思うわ」

「君の緑色もなかなかキレイになってきたね」

黄色い珊瑚のエネルギーが脈々とトパーズの球体に流れていました。

「なあエメラルド。別に虹色の海じゃなくても、どこにいても願いは叶うものだよ」

「そんなことないわ。流れ星にお願いしても、叶わない願い事があるのよ ... 」

エメラルドは夜空を見ながら何度も、お願いしていたのです。母にもう一度会いたいと。

「エメラルド、それは流れ星を信じていないからさ」

「えっ、じゃあ、流れ星を ... 流れ星をもっと信じてあげればいいの？」

「そうさ、流れ星を本気で信じてあげるのさ。まあ、信じる力を信じるってことだね」

トパーズは笑いながら言いました。

「そんなことより今度の満月の夜、お祭りに行かないか」

「うん、絶対に行くわ。お祭りは大好きよ！」

「よし、でっかい月の上で踊り明かそうぜ」

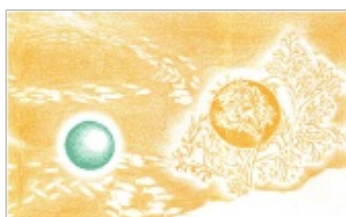
お祭りのことを考えていると、エメラルドはワクワクしてきました。

「エメラルド、その夜は迎えに行くから月の見える場所にいるんだよ」

トパーズは念を押すようにエメラルドに言いました。

「十五夜に月が見えない場所なんてあるかしら？」

「あるよ。うつむいて下ばかり見ていたら、月も見えなくなる」



題十三話 赤い城

黄色い海のみんなとの別れを惜しんで、エメラルドは東の海へ旅を続けました。

「なんだか波が強くなってきたみたい ... 」

海の中から空を見上げると黒色の雲が速く動いていました。

だんだんと雨雲が空をおおい隠し強い風が吹いてきました。そして激しい、

雨。雨。雨。

雨。雨。雨。

「水の色が赤い ... ここは赤色の海？」

それは嵐の始まりでした。今にも雷が落ちてきそうな予感。荒れ狂う波。

その力強い波にエメラルドは逆らうことができません。

「強い ... こんなに強い波は初めてだわ」

それはエメラルドを強引に、深い海の底へと引きずりこみました。

そこは深い深い海の底にある赤色の村でした。

「旅のもの！ 長老ルビー様がお呼びだ！ 急いで行け！ 無礼のないように！」

お城の門番をしている大柄な赤色の水球が言いました。

「この大きなお城はいったいなんなの？」

エメラルドの前には大きな赤い城が立ちはだかっていました。

「赤色の海の長老！ ルビー様のお城である！ 早く行け！」

「その傲慢な言い方は止めてほしいわ」

「早く行け！ 消してしまうぞ！」

お城には沢山の堅固な壁が連なっていました。

「どんな長老様が住んでいるのかな？」

エメラルドは不思議と、赤色の長老の力に惹きつけられていました。

そして心は熱くなり、石の階段を登り赤い城へ入って行きました。



題十四話 七つの海の王

「大きい ...」

エメラルドは驚きました。無理ありません。

長老ルビーの球体は本当に大きかったです。

「我の名はルビー！ 旅のものよ！ 命令だ！ 今日から我の兵隊になれ！

存分に戦うがよい！ 勝利の栄光を味わおうではないか！」

ルビーは低い声で、大きな声で言いました。

「いやよ、わたしは戦うのが嫌いなの。だってつまらないもん」

エメラルドはきっぱりと断りました。

「訳のわからぬことを言うな！ 共に戦い赤色ではないものを全て消すのだ！」

「どうしてあなたは戦うの？」

エメラルドにはルビーの気持ちが理解できませんでした。

「黙れ！ この世界の全てのものを支配するのだ！

そして我は七つの海の王となるのだ！ 我だけが唯一の神となるのだ！」

「ねえ、そんなことより今度みんなで満月のお祭りに行こうよ。

そのほうがよっぽど楽しいと思うし、あなたが来るときっと盛り上がるわ！」

エメラルドはトパーズのことを思い出していました。

「愚かもの！ 我を他のものと同じにするな！ 我は選ばれた特別な存在なのだ！」

ルビーは真っ赤に光り輝きました。そしてなんだか怒り始めてしまったのです。

「無礼ものめ！ 我は七つの海の王となるものぞ！ 貴様に決闘を申し込む！」

その怒りの叫び声は城内に響きわたりました。

「消えるがよい！」

その恐ろしい声に流石のエメラルドも身震いしてしまいました。

「太陽と月の印よ！ 我に既に勝利を約束された事に感謝いたします！」

ルビーは天に祈りを捧げていました。

「よく聞けい！ 我は二千年戦い続けていまだ敗北はない！」

「二千年も ...」

「冥土の土産に勝利の秘密を教えてやろう！」

「勝利の秘密 ... ?」

ルビーは華麗に、そして鮮やかに一步後ろに踏み出しました。



題十五話 勝利の秘密

「勝利の秘密！ それは己を疑わないことだ！

己の心が勝利を疑い始めたその瞬間に！ 惨めな敗北が約束されるのだ！」

ルビーは一瞬にしてエメラルドの前に接近しました。

「敵はつねに己の心の中にあり！」

ルビーの赤色の気迫がエメラルドに襲いかかってきました。

それはもうまさに嵐のような強い力でした。

「緑色のものよ！ 消えるがよい！」

「イヤッ！ ・ ・ ・ くるしい ・ ・ ・ 」

赤色の光がエメラルドの心を力強く射していました。

その光はエメラルドの心の自由を奪い支配しようとしていました。

「ああっ ・ ・ ・ 動けない、まずいわ ・ ・ ・ どうしよう ・ ・ 」

エメラルドの心の中はだんだんと怖くなってきてしまったのです。

その球体は動けず萎縮して、ルビーに飲み込まれてしまいそうでした。

そんな時でした。心の中でだれかが何度もこう囁くのです。

「決して恐れてはならぬぞ。恐れれば恐れるほど、それを惹きつけることになる」

エメラルドには確かにその声が聞こえたのです。

それはなんと、あの緑色の長老ヒスイの声でした。

「確かに聞こえたよ、あなたの言葉 ... 。

そうよ！ わたしは恐れない、絶対に恐れないよ。それが旅の掟！」

エメラルドは何度も自分の心に言い聞かせました。

そしてエメラルドは冷静に現実を見ました。ルビーはもうカンカンに怒っています。

それを見た兵隊は恐れおののき萎縮していました。

「ああっ ... 見える ... 見えるわ！」

その緊張感はまだで 時間 が止まっているようでした。

「わかったよ！ わたしはもう恐れないわ！」

「なんだと！」

「あなたはみんなを怖がらせて、元気を奪い獲って大きくなっているだけよ！」

「なにっ！ 貴様は見えぬものを信じるものなのか！」

なんと、ルビーは怒りで相手の心を恐怖させて、元気を奪い獲って大きくなっていたのです。

ゴロゴロゴロ！ ゴロゴロゴロ！ ドカカカカーン！

それは突然でした。大きな爆音が城内に響きわたりました。

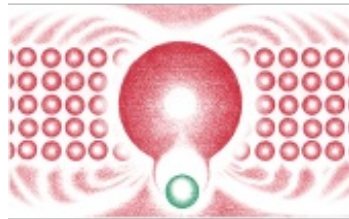
どこかで大きな雷が落ちたのでしょうか。

「ルビー様！ 報告です！ 敵の軍勢が攻めてきたようです！」

「なにっ！ 敵を返り討ちにするのだ！ 急げ！」

ルビーと兵隊は急いで走り去って行きました。

その隙にエメラルドはその場を立ち去りました。



題十六話 花の都

エメラルドは東の海へ旅を続けました。

なんだか赤色の海で少し疲れてしまった様子です。

「パパ、ママ。この星には色々な世界があるのね ... 」

エメラルドはしみじみとももの思いにふけていました。

「うん？ いい香り ... いったいなんの香りかしら？」

どこからか甘い香りがしてきました。

エメラルドは無我夢中になり、その香りに引き寄せられていました。

すると摩訶不思議。なんと目の前には、ピンク色のお花畑が広がっているではありませんか。

「ステキ！ここはきっと花の都ね、ママが教えてくれた。

この水の星のどこかに、海の中でも花が咲き誇る世界があると」

お花畑の中心には大きな花がありました。その花だけは何故かつぼみのままでした。

「まあカワイイ ... なんて大きな花かしら。いつになったら花開くのかな ... 」

「待っても無駄だよ」

そばで花をつんでいた、ピンク色の水球が言いました。

「この花は特別な時にしか咲かない。僕もまだ見たことがないんだよ」

「そうなんだ、いったいどんな花を咲かせるのかしら」

エメラルドはその大きな花のつぼみに見惚れていました。

「君も花が好きなんだね。僕の名前はローズ、君は？」

「わたしはエメラルド。緑色の海からきたの」

ローズの球体はピンク色に光り輝いていました。そして優しい香りがしました。

「エメラルド、僕がこの花の都を案内するよ」

「うん」

「まずは都で一番キレイな花の森へ行ってみるかい？」

エメラルドは自分の名前を呼ばれて、胸がキュンとしていました。



題十七話 花の風

花の森。そこはピンク色に煌く花たちが無限に咲きみだれていました。

きっと都で一番のいい香りがする場所なのでしょう。

「まあっ、なんて優しい香りなのかしら ... 」

「この香りは長老様の香りだよ」

ローズとエメラルドは、花の森の奥へ奥へ入って行きました。

そこは花の都の長老、サファイアの住み家でした。

「エメラルド、ようこそ花の都へ。私の名はサファイア」

「わたしはエメラルド ... 」

エメラルドはとても安心していました。

サファイアの声が本当に温かく優しくかったです。

「長旅で疲れているでしょうに。都でゆっくりと休みなさい、花たちが癒してくれるわ」

「うん、ありがとう」

サファイアは花たちと共にエメラルドを祝福してくれました。

「エメラルド、あなたは虹色の海を探して旅をしているのね」

サファイアはエメラルドの色々な思いを香りを感じていました。

「サファイア様、虹色の海はいったいどこにあるの？ 本当にあるの？」

「どんな願いも叶うという伝説の七色の海。いったいどこにあるのかしらね」

「サファイア様も知らないの ... 。

わたし ... 絶対に ... 絶対に虹色の海へ行きたいの」

エメラルドは母の事を想っていました。

そして、それ以上に旅での色々な出来事が虹色の海へ行きたい。

そういう強い気持ちに駆り立てるのです。

ルルルルール。花の風が森を吹き抜けました。

サファイアはピンク色の花のめしべとつながっていました。

「エメラルド、私は、いま、ここが、虹色の海だと思っているわ」

サファイアは一粒の種を大地に捧げました。

「私は誓う。

この世界の全てを、いつの日か花の香りで、愛の香りでいっぱいにしてみせる」
サファイアは光り輝いていました。その光はエメラルドの心を射しました。



題十八話 心

サファイアの煌く光は神秘的でした。

その輝きはまるで宝石のように本当に美しいものでした。

「サファイア様、わたしも花のように美しく輝きたい。どうすれば輝けるの？」

美しく咲き誇る花たちに魅せられて、エメラルドはたまらず問いました。

「エメラルド、答えはシンプルよ。心、心が全ての始まりよ」

「心には相反する二つの花しか咲かないの。

それは愛の花と・・・ もう一つは、不安という名の花よ」

一輪の花の風がまた森を吹き抜けました。

「愛か不安 ... 確かにどちらかしかない ... 」

「私はいつも花たちと共に自分の心を見つめ、つねに愛を選ぶように努めているわ」

「でも楽しいことばかりじゃない。つらい時もあるわ ... 」

エメラルドは長い旅を振り返り、そう感じるのです。

「そうね。そんな時は心の中で、楽しいこと、嬉しいことだけを想像してごらんなさい」

「そうか ... 。嬉しいことかあ、そうね ... フフッ、フフフッ ... 」

エメラルドは嬉しいことを想像していると、なんだか笑ってしまいました。

「ハハハッ。エメラルド、君はいったい何を考えているんだい？」

ローズも笑っていました。サファイアもそっと微笑み、エメラルドにこう告げました。

「花があるから嬉しいわけじゃない。嬉しいから、いま、ここに、花があるのよ。

この法則を忘れないでね」

深い深い花の森。エメラルドはとても温かい気持ちに満たされていました。



題十九話 おばあ

「エメラルド、僕はおばあにお花を届けに行くけど、一緒に来るかい？」

「うん」

ふたつはお花を持ってローズのおばあのところへ向かいました。

そこはお花畑の片隅でひっそりとしていました。

「おばあ、調子はどう？ ほら、この香りをかいでごらん、花の森のお花だよ」

「あいやあーいい香じゃーだねえ、

ぬちぐすいさあ。だあ、ローズ、早く恋人を紹介してみい」

おばあはカタカタと陽気な声で笑いました。

エメラルドは驚いていました。

なぜなら、おばあの球体の中に小さな黒色の玉が光り輝いていたのです。

「おばあ、彼女の名はエメラルド。さっき大きな花の下で偶然出会ったばかりだよ」

「だからさあ！ 出会いに偶然はないよお、必然さあねえーっ。

あんたら見てたら、ちむわさわさあーするさあ！」

おばあはまたカタカタと大笑いしていました。

「コホン、コホン・・・コホン、コホン・・・くるしい・・・ちゃーならん」

おばあの咳はなかなか止まりませんでした。

エメラルドは黒色の玉の光が気になっていました。

「おばあ... だいじょうぶ？」

「なんくるないさあーっ。うちのちゅらさ娘エメラルド。

体だけは大事にしなさいよおーっ、命どう一宝よおーっ」

そう言うと、おばあはまた咳きこんでいました。

「わかったよ...。おばあも早く元気になってね」

「あいよーっ。エメラルド、しらんちゅーの心を食って元気を奪ったりせんけえ。

そんなことしてたら病気になるかねんさあーっ」

「うん...」

エメラルドには都の古い言葉はよくわかりません。

けれど、おばあの言いたい事はなんとなくわかりました。



題二十話 黒色の花

ここは都の中心にある大きな花の下。

都のものはみんなで楽しげに歌を詠んでいました。

「エメラルド、君はこの花の都に何種類の花が咲いていると思う？」

初めて出会った大きな花の下、ふたつにとって特別な場所でした。

「わからない ... いったいどれくらい？」

「六十憶種類以上の花が咲いているんだ。

僕はその全ての花の香りの性格を知っているんだよ」

ローズの声が好きでした。その声はいつも温かく優しいのです。

ローズは大きな花のつぼみを見つめていました。

「おばあは黒色の病をわずらっている。もうそんなに長く生きられない ... 」

「黒色の病？」

「ああ、この広い花の都にたった一輪だけ ... 。

枯れることのない、あの黒色の花が咲き続けているんだ」

枯れることのない黒色の花。それはいったい何を意味しているのでしょうか。

「あの花にふれると病におかされる。

たったの百年くらいしか生きられなくなってしまうんだ」

「そんな ... たったの百年だなんて ... 」

エメラルドはおばあはの病のことを知り悲しくなりました。



題二十一話 約束

「ローズ、都には黒色の病を癒すことができる花はないの？」

「都にはない。だけど、この広い世界のどこかに、

どんな病も癒すことができる特別な花があると聞く」

特別な花。

それはどこにあるのでしょうか？ なんとという名前の花なのでしょうか？

「エメラルド、僕はその花を探しに旅に出る事に決めたよ」

ローズは強い決意を抱いて言いました。

「エメラルド、君が僕に勇気をくれたんだよ」

「えっ ... 」

「君は恐れることなく、虹色の海を探すために大きな海を旅している。

その強い勇気が僕にも必要なんだ」

ローズの強い気持ちを感じていました。

しかし、エメラルドにも強い気持ちが芽生えていたのです。

そばにいたい。離れたくない。ずっとローズと共にこの都で生きていきたいと。

「エメラルド。いつか僕が、その癒しの花を見つけることができれば、

一番に君に会いたい。約束してくれるかい？」

ローズがエメラルドに触れました。一輪の花の風が吹きました。

「うん ... 。約束するよ ... 。この大きな花の下で待ち合わせよ ... 」

ふたつは約束を結びました。ローズはエメラルドに別れを告げて旅立ちました。

エメラルドは涙があふれて止まりませんでした。



題二十二話 孤独

花の都をあとにして、エメラルドは旅を続けました。

「ローズ・・・ローズ・・・」

エメラルドは心の中で何度も叫んでいました。

恋しいものと一緒にいられないこの切なさ。胸の張り裂けそうなこの寂しさ。

生まれて初めてのこの気持

ちを、どうしたらいいのかわかりません。

「会いたい・・・会いたい・・・いますぐ会いたい・・・」

そして激しい不安に襲われました。それは、あばあが消えてしまうかもしれない。

それは、ローズと二度と会うことができないかもしれない。

だんだん辺りは暗くなり始めていました。

波の音は消えて、珊瑚や魚たちの姿も見えなくなりました。

エメラルドは真っ暗な闇の中で、ひとつぼっちになってしまったのです。

「さむい・・・さむいよ・・・」

海面の向こうの遙か遠い夜空に、小さな月が輝いていました。

半月でした。その小さな月はいつもよりキラキラと光っていました。

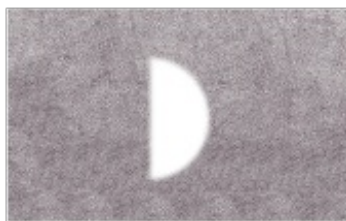
「つき　　ひかり　　」

エメラルドは月の光を見て思い出していました。

そう、旅立ちの朝の父の言葉を。父の思いを。

「パパ・・・わたし・・・絶対にあきらめないよ・・・」

エメラルドは父の言葉を胸に抱き、再び力をふりしぼって前に進みました。



題二十三話 瑠璃色の光

エメラルドは眠っていました。そばには大きな青色の水球がいました。

その水球は華麗に瑠璃色の光を放っていました。

その光はエメラルドを安らかに包みこんでいます。

「ここはどこ ... あなたはだれ ... 」

太陽がずいぶん小さく見えました。ここは青色の海の深く深くにある、病の村でした。

「ここは青色の海、わたくしはラピスラズリィ」

「あなたがわたしを助けてくれたのね、ありがとう」

瑠璃色の光に包まれたエメラルドは、不思議と元気を取り戻していました。

「月光がなければあなたに気づけなかった。

あのまま沈むと、闇の深海の世界に落ちるところでしたよ」

「闇の深海 ... 」

エメラルドは辺りを見まわしました。

なんと、病のものがラピスラズリィに救いを求めています。

そしてラピスラズリィの放つ瑠璃色の光に包まれると、

みんなの球体の中にある黒い玉が薄くなり消えてゆくのです。

「まあ ... 。奇跡、奇跡だわ。どうすれば病を癒すことができるの？」

「奇跡ではありません。あなたも小さい頃、

母の子守唄で癒されたことがあるでしょうに ... 」

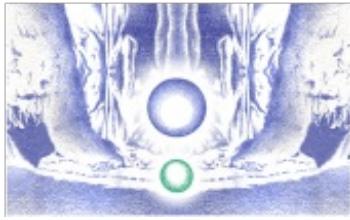
「うん。ママの唄を聞くと、どんな痛みもすぐに消えてしまったよ」

エメラルドは母を、優しいあの母を思い出していました。

「ならば子守唄を唄う母のような気持ちで生きなさい。

そうすればあなたも癒すことができるでしょうに」

青色の海の長老ラピスラズリィは静かにそう言いました。



題二十四話 自分

それは突然でした。病にある青色の水球が黒色になり、光り輝き消えてしまったのです。

その光景を見ていたエメラルドはとても不安になりました。

「急がないと ... おばあも消えてしまうかもしれない ... 」

そんなことを考えていると胸が苦しくなってきたのです。

「エメラルド、否定的な感情にならなくてもよい。それを長く持ち続けると病になります」

「でも ... 愛しいものが ... 愛しいものが消えてしまうかもしれないの ... 」

「エメラルド。消えることは逃れられない宿命。

それを否定的に捉えてしまうと、沢山の苦しみを生む事になります」

ラピスラズリィは静かに言いました。

しかし、今のエメラルドにはどんな言葉も届きません。

「早く黒色の病をなんとかしないと ... 」

冷たい青の風が吹いていました。それは凍てつくような冷たい青の風。

おばあは大丈夫かな ... ローズは今どこにいるのかな ... 。

エメラルドの心には不安が絡みつき離れませんでした。

「エメラルド。あなたは紫色の海へ行きなさい。そして、自分を知りなさい。

自分を知ることが全ての近道になるのです」

「自分 ... 」

ラピスラズリィはエメラルドを見つめていました。

エメラルドはラピスラズリィの強い思いを感じていました。

「わかったよ、ラピスラズリィ。本当にありがとう。またいつの日か会える時を」

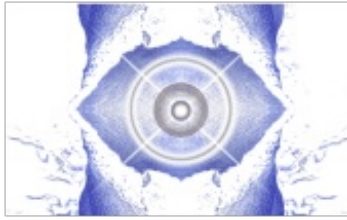
「はい。何度でも、何度でも、あなたが求めるなら。

わたくしはいつまでも、この瑠璃色の光を掲げましょう」

エメラルドは紫色の海へと向かいました。

エメラルドの球体には瑠璃色の光がほのかに残っています。

その光は清々しい朝の空のようでした。



題二十五話 珊瑚の死骸

静寂。そこは何ひとつ音もなく、海の香りもしない海に感じました。

真っ白に見えた砂浜には、よく見ると沢山の珊瑚の死骸が散らばっていました。

「いったい何があったのかしら？」

珊瑚の死骸たちは白く光り、エメラルドを中心へと導いてくれました。

「ホッホッホッホッホッ ... 」

あら、どうしたのでしょうか？

テーブルのような珊瑚の上で、紫色の小さな水球がなにやら笑っています。

「こんにちは、ここが紫色の海ね。あなたは何がそんなにおもしろいの？」

エメラルドはその紫色の水球にたずねました。

「わからん。ホッホッホッホッホッ！ ホオーッ！」

その水球はさらに大笑いしていました。

陽気にはしゃいでいるその姿は、エメラルドにはかわいらしく思えました。

「ねえ、この海でなにかあったの？」

「ホッ、となりの海でなあ、だれかが大きな赤い城を作っておるのじゃ。

あまりにも沢山の赤色が流れ込んでのう、サンゴが死んでしまったのじゃ」

「赤色が ... そんな ... 」

「ホッホッホッ、色のバランスが崩れてしまったのじゃよ。

生命は一つでは生きてゆけん。

個々は互いに依存し合う、一つの大きな生命でもあるからのう」

紫色の長老は、唯一の生き残りの珊瑚の上に座り広い海を見渡しました。



題二十六話 魔法の国

「緑色の海のエメラルドよ、前もっておぬしに伝えたい事があるのじゃが」

「なに？」

長老の声はなぜか楽しそうでした。

「この紫色の海を越えた東の果てに何があると思う？」

「虹色の海に決まっているわ！ そのためにこの長い旅をしてきたのよ！」

「ホッ、残念じゃたなあ。この海の向こうにあるのはのう、緑色の海。おぬしの故郷じゃぞ」

「えっ ... 冗談でしょ？」

「わしは冗談は嫌いじゃ。ホッホッホッ！ ヒスイの奴にいっぱいいわされたのう！」

エメラルドは全然笑えませんでした。ここまで来るのが本当に大変だったのです。

「そんな ... 虹色の海はいったいどこにあるの？」

「ねえ、お願い教えて！ わたし絶対に行きたいの！」

エメラルドは必死に問いました。

「では、このサンゴの上に座ってみい」

「えっ、どういうこと？」

「この紫色のサンゴは不思議な生き物でなあ、わたらの思考を食べて生きとるのじゃ」

「思考を食べる？」

「そうじゃ。まずはおぬしの心にこびりついとる、思考を食べてもらわねばならん」

「私の心にこびりついてるって ... 」

「虹色の海とは物質的な場所のことではない。まずはおぬしの心の位置を変えねばならん」

エメラルドには、いまひとつ意味がわかりませんでした。

「ぐだぐだ考えんと、このアメジスト博士を信じて座ってみい」

エメラルドはその言葉を信じて紫色の珊瑚の上に座ってみました。



題二十七話 夢と現実

「フッ、フフフッ ... フフフッ ... ワハハハッ！ ワハハハハハハハァーッ！」

エメラルドは理由はわかりませんが何度も大笑いしてしまいました。

「なんだか楽しくなってきたわ。どうしたのかしら ... 」

紫色の珊瑚の放つ光がエメラルドの球体を包み込んでいました。

「ホッホッホッ。子供の頃は理由などなくても、いつも笑っておったのではないか？」

「うん、子供の頃は一日何百回も笑っていたと思うわ。

でも大きくなると、そんなにいっぱい笑えなくなってしまったよ」

エメラルドは子供の頃の気持ちを思い出していました。

「子供はいつも笑っておるじゃろ、生きているのが楽しいのがわしらの本性じゃからのう。

じゃが大きくなると本性を隠してしまうのじゃよ」

「なにが、いったいなにが本性を隠してしまうの？」

エメラルドは真剣に問いました。

「思考じゃよ」

「思考 ... ？」

「思考が心の中にある過去と未来をさまよい、一日何万回も心の中を走り回っておる。

そいつが心を支配して、いま、ここに、いることを忘れさせるのじゃ」

「思考 ... 、確かにわたしはいつも色々なことを考えているわ」

「ホッホッホッ、過去も未来も己の思考が作りだした幻想にすぎぬぞ」

「あっ！ そうか ... 」

「いま、ここを、感じる事が心の本来の在りかたなのじゃ」

「いま、ここを、感じる事 ... 」

紫色の珊瑚の光はエメラルドの緑色を照らしていました。

エメラルドは思考から解き放たれ、いま、ここを、深く感じ始めました。

そして気持ちよく座っていると、どこからかこんな話し声が聞こえてくるのです。

「よし。みんな、お祭りの準備はいいか。いよいよ行くぞ、おうっ！」

どうやらその声は、目の前の珊瑚の中から聞こえてきます。

「サンゴの中から声が聞こえる ... 。わたし、どうかしてしまったのかしら ... 」

「ホッホッホッ、大丈夫じゃ。おぬしは紫色の光を浴びてのう、

気持ちが子供の頃に戻っておるのじゃ。昔はみんなと話せたじゃろうに？」

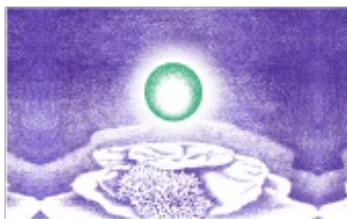
「そうね。あの頃は、星や雲、石やサンゴ、風の歌も聞こえたよ ... 」

エメラルドは不思議と小さい頃の気持ちになっていました。

そして珊瑚の声に耳を澄まさせていました。

すると珊瑚の中から、なんとあの恋しい声まで聞こえてくるのです。

「 エメラルド エメラルド 」



「さすれば道が開かれるやしれん」

エメラルドは心を静かにして自分の心を見つめました。



題二十九話 珊瑚の十五夜

エメラルドは小さい頃の事を思い出していました。
日が暮れるまで夢中で遊んだあの海。時を忘れて拾い集めた光る石。
空を見上げると、雲が何にでも見えていたあの頃。
心はとても穏やかで、まるで母の子守唄の中にいるようでした。

「久しぶりだなエメラルド、旅は楽しいだろう？」
目の前にいる珊瑚が話しかけてきました。
「そうね、色々あったけど、まあまあ楽しかったかな」
エメラルドは珊瑚に言いました。

「今夜は満月のお祭りの準備で忙しいんだ」
「まあ、お祭り！ わたしも招待してくれるのかしら？」
「もちろんさ！ 約束だろ。でっかい月の上で踊り明かそうぜ！」
「その声は、あなたはまさか ... 」
「こんな所で君に会うと思っていたよ」
エメラルドは黄色い海の中にいました。

「お久しぶりね、黄色い海の長老トパーズ」
「全然。久しぶりじゃないよ」
「ねえ、トパーズ、この世界は本当はどこなの？ 教えて！」
「この世界？ ここはどこにでもなる世界だよ。君が思い描く世界にね」

満月のお祭りの始まりでした。小さな珊瑚の卵が夜空に向かって舞い昇っていきました。
無限の可能性を秘めた新しい生命の誕生の時でした。
海の石はみんなでリズムを刻み、触れ合う波と波は旋律を奏でています。
満月の光の中で、エメラルドは我を、我を忘れてみんなと踊り明かしました。
そんなエメラルドは月光を浴びて、真珠のように真っ白に光り輝いていました。



題三十話 虹色の海

赤。橙。黄。桃。緑。青。紫。七つの色が流れていました。

「いろんな色が混ざり合ってる ... 」

エメラルドは初めて見る色の調和の美しさに感動していました。

すると、エメラルドの前に白色の水球が現れました。

「こんにちは。僕の名前はパール、よくここまで来たね」

「わたしはエメラルド。よろしくね」

「エメラルド、ここが虹色の海だよ。おめでとう」

「虹色の海 ... ここが虹色の海なのね！ やっとここまで来た！ バンザァーイ！」

そう、ここは旅の終着点。虹色の海。

エメラルドは大喜びでした。やっと虹色の海に辿り着くことができたのですから。

「わたし ... どうやってここにこれたのかしら？」

「ハハハッ、今度トパーズに会ったら聞いてみればいいよ」

「そうね。パール、あなたはなんて美しいの。純白に光り輝いているわ」

「へへッ、ありがとう」

太陽のように強く、月のように美しく煌くパール。その姿はまさに真珠のようでした。

「そうだ！ ここはどんな願いも叶う伝説の海でしょ？」

「ああ、そうさ」

「やったあ！ わたし、お願い事がたくさんあるの！ えーっと、なんだったっけなあ ... 」

「ハハハハッ、ここまで来て願い事を忘れちゃう、間抜けな奴が以外に多いんだよ」

「ウフフッ、それは皮肉ね。あっ、思い出した！ 虹よ！ 虹になって空を飛んでみたい！」

「よし、なろう！ 僕にしっかりつながりな。この世界に慣れるまではサポートするよ」

「つながるって ... どうやって？」

「信頼しろってことだよ」



題三十一話 色

「エメラルド！これが近くで見る虹の姿だよ。エッヘーン！どうだい！」

なんということでしょう。

パールは、赤。橙。黄。桃。緑。青。紫。変幻自在に球体の色を変えていきました。

「えええええっ！パール。あなたはどんな色にでもなれるの？」

「もちろんさ！白色は色が無いことじゃないよ。

全ての光の色が重なり混ざっているってことなんだ」

そう言うとパールは七色の光を放ち、虹になりました。

「エメラルド、君もきっと虹になれるよ。

旅の中で色々な経験をしてきただろ、きっと色々な気持ちがわかると思うよ」

エメラルドは思い出していました。

ヒスイ、コハク、トパーズ、ルビー、サファイア、ラピスラズリィ、アメジスト。

そしてローズ。旅の途中で出会った水球たちを。その思いを。

「僕たちはみんな本来は同じ真っ白なんだ。

それぞれが心を使って、光に色々な色を描いているのさ」

「うん。みんな同じ大地につながり生きる、色々な色をしたサンゴみたいなものね」

「みたいなものさ」

エメラルドは大切な、本当に大切な旅の思い出を胸に抱いていました。

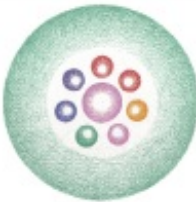
そして、七色の光を放ち 虹 になりました。

「やったね！虹のエメラルドだ！」

「フアァーッ！ ヤッタァーッ！ 気持ちいい！」

「さあ君の次の願いは知っているよ。僕たちの住むこの水の星を見たいだろ！」

「うん！ 見たい！ 見たい！」



題三十二話 水の星

丸い球体が宇宙に浮かんでいました。

その球体の中では色々な色が混ざり合い動いていました。

そう、それは水の星。エメラルドは星を見つめながら、果てしない浪漫を感じていました。

「この水の星 ... なんだかわたしたちにそっくりね。形とか色も」

「ハハハハッ！ そりゃそうだよ。

あの大きな星は、小さな僕たち六十億個の水球の集まりだからね」

「えっ、そうか ... 。確かにそうね」

「エメラルド、君のその球体はどうやってできていると思う？」

「わたし ... まさか ... 」

「そうだよ、君の球体は小さな六十億個の水球の集まり。

まあ、君は緑の星のエメラルドってとこだね」

「わたしの中に、いっぱいのが詰まっているのね ... 」

「そうさ」

エメラルドは壮大な気持ちでした。そして、この星の姿をみんなで見たいと思いました。

「パール、叶えてほしい大切なお願いがまだあるの」

「願いは自分で叶えるものだよ。方法は簡単、君はもうそれを知っているよ」

「方法？ いったいどうすればいいの？」

エメラルドがそう聞くと、パールは自信満々の声でこう教えてくれました。

「願いが叶った時の大喜びの心があるだろう。

そしたら、いま、ここで、その大喜びの心になってごらんよ」

「そうか ... なるほど ... だんだんわかってきたわ！」

エメラルドはドキドキ、ワクワクしていました。

そして、不思議となつかしい気持ちになっていたのです。

「さっきからずっと君のママが見ているんだよ。エメラルド、また遊ぼうな。バイバイ」

パールはそう言い残し一瞬にして消えていきました。

すると水の星が姿を変えていくのです。



題三十三話 母

なんとまあ、摩訶不思議。あの水の星が緑色一色になっているのです。

それはまさしく、あの母でした。

「ママ！」

「エメラルド」

「ママ、会いたかった ... 本当に会いたかったよ。奇跡よ！ 奇跡が起きたのよ！」

「そうよ、奇跡よ。生きることは常に奇跡の連続だから」

それはあの優しい声でした。

「エメラルド、素敵な旅をしてきたのね」

「うん。ママ、本当にママだよ ... これは現実？ それとも夢の世界なの？」

「現実でもあり、夢でもあるわ」

「ウフッフ、ママと一緒にならどっちでもいいや」

エメラルドは母のぬくもりに包まれていました。

そして緑色の海の中にいました。なつかしい大好きな故郷に帰ってきたのです。

「ママ ... この海は本当に、どんな願いもあつという間に叶ってしまうのね」

「そうよ、虹色の海は時がない世界よ。だから心が願うと同時に現実を創るのよ」

「時がない ... 時間がないってどういうことなの？」

時間のない世界。エメラルドにはどうしても不思議に思えてならなかったのです。

「いましかないの。だから過去も、あなたが想像できる全ての未来も、

思い描ける全てが、いま、ここで、何度でも経験できるのよ」

「魔法！ ここはやっぱり魔法の世界だわ」

エメラルドは、はじめてしまいました。もうワクワク、ドキドキ、ルンルンです。

そんなエメラルドを見て母は言いました。

「エメラルド、水の星もまた魔法の世界なのよ」

「違うわ。水の星はおもいきり現実の世界よ。だから、なかなか願いが叶わないの」

エメラルドは旅の中での色々な出来事を思い出していました。



題三十四話 虹

「エメラルド、水の星は時がある世界なのよ。

だから心が願って現実を創るまでに、時間というものがあるのよ」
時間。それは今のエメラルドにとって、はがゆいものを感じました。

「ママ、じゃあ時間がある世界で願いを叶えるにはどうすればいいの？」
エメラルドには叶えたい願い事が一つだけあったのです。

「ならばエメラルド、願いを、自分の夢を信じなさい。
そして、心と現実の間にあるその時間を信頼するのよ」

「信じること」

「そうよ、最後まで信じなさい。そうすれば水の星もまた 魔法の世界 になる」

大きな銀河には沢山の星が輝いていました。

エメラルドは母と時を忘れて天の川で遊んでいました。

すると星たちがキラキラと騒ぎ始めたのです。

「エメラルド、さよならの時が近いようね」

エメラルドもその時を感じていました。だから最後に母にこう聞いたのです。

「ママ、もしこの先ひとつぼっちの孤独になって、
深い ... 深い闇に沈んでしまったらどうすればいいの ... ?」

エメラルドは泣いていました。けれどその涙は悲しみの涙ではありません。

「エメラルド、例えどんな深い闇の中でも、
いまを、自分を愛しなさい。 出会う全てを愛し続けるのよ」

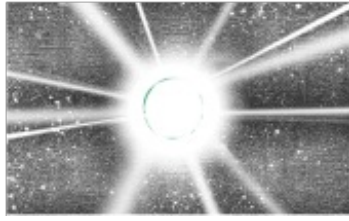
「ママ ...」

「なぜなら出会う全ては、自分自身だから。
過去と未来の自分の姿と永遠に、いま、ともに在ることが真実なのよ」

母はエメラルドを深く抱きしめました。

「エメラルド、旅立ちなさい。愛の光となって、
みんなをつなげている 虹 を光り照らすのよ」

果てしない銀河。エメラルドは七色に輝き、真っ白な光となり天の川へ消えていきました。



題三十五話 再会

花の都はなんだかにぎわっていました。

みんな大きな花の下に集まっているのです。

それもそのはずです。あの大きな花のつぼみが開きそうなのです。

そう、特別な時がやってきたのです。

「エメラルド」

「ローズ」

ここはふたつが初めて出会った場所でした。

「エメラルド、約束どおり、僕は花を見つけたよ」

「ローズ、わたしもよ」

ふたつは自信に満ち溢れていました。

「エメラルド、僕たちは何度も出会い別れて、いま、ここに、いるんだね」

「うん ... 不思議なものね」

ふたつはにっこりと笑いました。

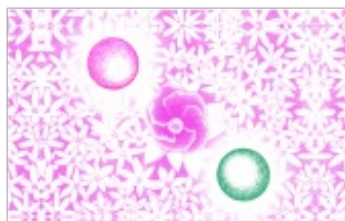
「緑色の海は本当にキレイだった」

「うん」

ふたつは見つめ合っていました。

そして、大きな花の花びらが広がっていきます。

ローズとエメラルドには、その花の音が聞こえました。



「ローズ、エメラルド、おめでとう。今日は特別な記念日ね」

それは聞き覚えのある優しい花の声でした。

「この花を愛の花と名づけましょう」

一輪の花の風が吹きました。

ローズは求めました。

エメラルドはそれを受け入れました。

ひとつとなったその光は、いつまでも光り輝いていました。

おわり



エピローグ



深い深い花の森。花たちは今日も美しく輝いていました。

「ローズ、あなたも旅立つのね」

「はい」

サファイアはローズから新しい香りを感じていました。

「ローズ、あの花を探すということは、

幾千もの時を戦い続けることを意味するかもしれないのよ」

「サファイア様 ... 」

「しかしローズ、あなたは旅立ちなさい。

きっとあなたなら、七色に光り輝く虹の花を見つけることができるわ」

「虹の花 ... 」

サファイアはローズを強く信じました。

「ローズ、旅の途中でも ... わたしの言葉を忘れないでね」

サファイアの声から少しのはがゆさを感じました。

「あなたが与えたものは全て、時を超えて、場所を変えて、

あなた自身が受け取ることになる」

花の都に別れを告げてローズは旅立ちました。

その胸にはエメラルドとの約束を抱いていました。

どんな病も癒す虹の花を探して、ローズの七色の海の物語が始まりました。

